

観光流行現象の変遷に関する基礎的考察

田中 皓大¹・岡本 直久²

¹ 学生非会員 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 (〒305-8573 茨城県つくば市天王台 1-1-1)
E-mail:s1820467@s.tsukuba.ac.jp

² 正会員 筑波大学教授 システム情報系社会工学域 (〒305-8573 茨城県つくば市天王台 1-1-1)
E-mail:okamoto@sk.tsukuba.ac.jp

日本国内では様々な観光に関係する流行現象（以下、観光流行）が発生しては減衰することを繰り返してきた。本研究ではそのような観光流行について基礎的な知見を得ることを目標としている。まず過去の国内観光流行がどのように変遷してきたかを観光雑誌の記述をもとに整理する。さらにその中からテーマ性を持った観光流行について温泉、テーマパーク、登山ハイキングを取り上げたのち各々の宿泊観光旅行参加率と参加者数について性世代別に整理した。その結果、ブーム前から比較的早い時期に参加率の高いコーホートはブーム減衰時期に参加率が大きく減少していることがわかった。

Key Words: trend, tourism, age, cohort, hot spring fad, theme-park fad, mountain climbing fad

1. はじめに

日本国内の観光は、時代によりさまざまな流行が存在してきた。その一例として、1990年代のオートキャンプブームがあげられる。オートキャンプとは自家用車・キャンピングカーなどでキャンプ場まで乗り入れるような、自動車を用いた形態のキャンプのことである。オートキャンプ参加人口は1980年代後半から急激に増加し、1996年には1500万人を超えた。しかしこの需要ピーク時に計画されたオートキャンプ場の建設が惰性的に続いた結果、参加人口が減少し、オートキャンプ場における赤字経営の割合も2002年頃には6割弱に達した¹⁾。

このような例から、現在の流行がいつまで続くのかという見極めについて行政当局・運営事業者である観光地・観光施設の供給側がうまく捉えきれていないことが問題ではないかと考える。観光投資を決断するのは観光という大きな投資をも伴う場合のある分野においてはより重要である。また今後の利益損失を少なくしていくという意味でも社会的意義があると考えられる。

そこで本研究では観光流行の継続性についての特徴を得ることを目的とし、観光雑誌から過去の観光流行の変遷を整理する。さらにそこから具体的な観光テーマについて実際の観光客参加率から動向を整理し考察を行う。

角本²⁾は実際のテーマパーク入場者数に順位・規模法則を当てはめた観光現象の普及的なシミュレーション結果を示した。また衰退・消滅プロセスを組み込んだ場合

も考慮し、「同調化」と「差異化」³⁾を閾値としたモデルを構築、アンケートにより観光地に対する情報の多さを指標として閾値の分布を得た。その結果、情報量が多い場合は観光ブームが最高潮に達したのちすぐさまブーム下降期に入ることがわかった。

赤壁⁴⁾は観光客収容能力、観光需要変数、口コミによる接触伝播率等から確率的ロジスティックモデルを構築した。ブーム需要によるオーバーストッキングが利用者の満足度低下や観光地の魅力の減退を招くものとし、ブームの終焉に関わる水準として設定した。その結果、スイッチング（利用者の不採用）が起こっていることを供給者が知覚するまでの遅延時間変数を示し、それが観光消費がブーム終焉に向かう際に生まれる利益損失リスクに等しいことを指摘している。

先行研究では観光流行をモデル化、またはシミュレーションを行った分析は存在するが、そもそもの観光流行の実態に即した研究は存在していない。本研究の位置づけとしてはそのような実際の動向を掴むことを目標としている。具体的には過去の観光雑誌からキーワードを抽出し観光流行の変遷を整理すること、さらにその中のいくつかのテーマ性を持った流行現象を取り上げ、観光参加データを性世代別に整理することである。

2. 国内観光流行の変遷

本章では、観光雑誌の記述内容を基に国内観光流行の

変遷を整理する。

(1) 利用データと調査方法

対象とする月刊「観光」⁹⁾は、かつて日本観光協会が発行していた月刊雑誌で、1977年に創刊され2004年に廃刊となっている。今回この雑誌「観光」から、観光流行に関するトピックを抽出する。1977-2002年3月号までを調査対象とし、「～ブーム」「～が流行っている」などその当時流行していることを指摘しているトピックについて、どれほどの期間継続したかを整理した。

(2) 調査結果

文献調査の結果を下の図1に示す。図1では観測された観光流行に加え、当時の社会背景（五輪・万博など国民への影響が大きい出来事、交通インフラの整備状況、景気、国民一人当たりの車保有台数等）をまとめた。

1980年代後半のバブル期には、多くの観光流行が存在していることがわかる。またスキーブーム、ホテルブームなど一度流行ったものが再び流行するケースが見られた。

いくつかの例を元に社会背景との関連性をみていく。

1987年の総合保養地域整備法（通称：リゾート法）が制定されると、全国の地方でテーマパーク建設の機運が高まった。開園直後は多くの客数を動員したものの長くは続かず、バブル崩壊時と期を同じくし多くのテーマパークは閉園、また建設計画は頓挫した。

また1960年代は国内で史上最大規模の国際イベント

である東京五輪に向けた観光客向けのベッド数の確保が急務であった。この時期にホテルニューオータニ、ホテルオークラなど現在にも残るような老舗ホテルチェーンも開業している。

二回目のホテルブームは1990年代終盤から2000年代に掛けてである。バブル崩壊の後を継ぐような形で外資系ホテルの参入が相次いだ。例えば新宿のパークハイアット東京、ザ・リッツ・カールトン大阪などである。

ブームを起こす理由は様々であるが、1990年前後のバブル期には多くのブームの存在が確認できたことから窺えるように、ほとんどが景気等の国内の経済状態に左右されていることが考えられる。

3. 観光テーマ別宿泊観光旅行参加者数の推計

本章では、前章で取り上げたようなテーマ性のある観光流行について、実際にどのような性別・年齢層の人々が取り入れていたかを整理する。データの取得が可能である温泉、テーマパーク、登山ハイキングを例に実際の宿泊旅行参加者数の推計を行う。

(1)利用データと調査方法

観光統計の選別として、佐藤ら(2013)⁹⁾は複数の観光統計について、設問の比較・統計の整合性の確認などを行

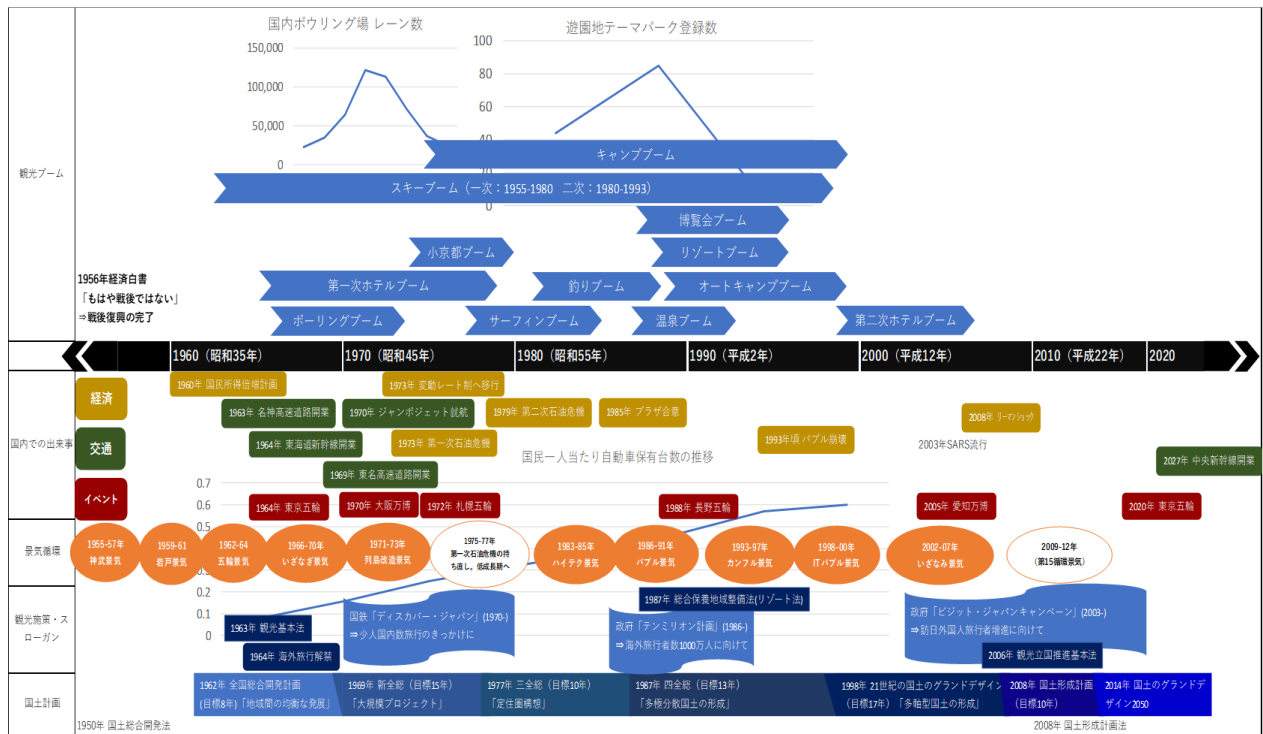


図-1 国内観光流行の変遷と社会の出来事

った。その中で「国民の観光に関する動向調査⁹⁾」は、他の観光統計の「旅行動向調査」, 「旅行消費動向調査」等と比較し、旅行内容の詳細な把握が可能であり制度も高いと指摘している。また本章での観光テーマ別のデータを性世代別に収集できるだけの母数を確保することも確認した。

そこで、今回本章では「国民の観光に関する動向調査」を用いることとした。この調査を用いた研究として日比野ら(2006)¹⁰⁾は、1970年から2000年の10年毎の観光行動参加者数の時系列変化を世代別に整理している。本章で用いるデータはコーホート変化をみるために日比野ら(2006)と同様に10年毎の時系列として示すこととする。

国民の観光に関する動向調査(『観光の実態と志向』内)は、国民の観光に関する動向調査(観光と実態の志向)は公益財団法人日本観光振興協会が昭和39年より継続して実施している観光統計で、昭和39年—平成12年度版までは2年毎に実施、平成12年以降は1年毎に調査が行われている。

今回は2年毎の調査時期に合わせるため、昭和39年度版から平成12年度版までと、平成12年以降の2年毎の調査(平成14年度版、平成16年度版…)を最新の平成28年度版まで参照した。今回「宿泊観光旅行先での行動(複数回答)」の調査結果を参照し観光テーマ別に性世代別の参加率・参加数の推計を行った。なお、参照した各回の調査概要を表1に示す。

a) 温泉

図2は、「温泉」宿泊観光旅行者数と参加率の推移を表した。月刊観光からは1986年4月号に『若者がナウい旅の代表として取り入れた』と述べられており、概ね1980年代後半—1990年代前半をブームと想定する。

図3, 図4は世代別宿泊観光旅行参加率[温泉・男性]

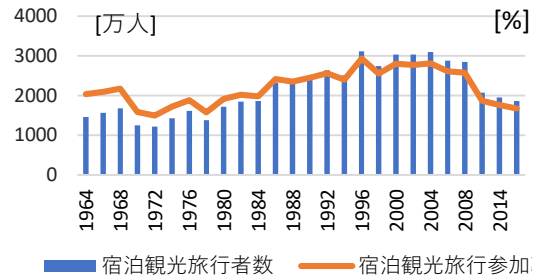


図-2 宿泊観光旅行者数と参加率の推移[温泉]

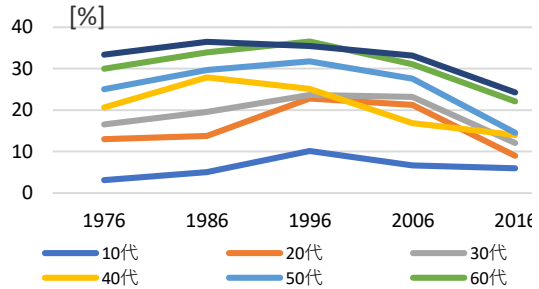


図-3 年代別宿泊観光旅行参加率の推移[温泉/男性]

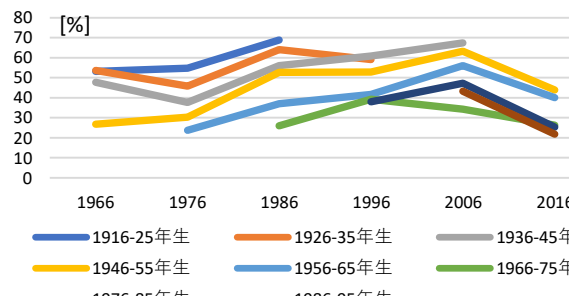


図-4 コーホート別宿泊観光旅行参加率の推移[温泉/男性]

表-1 国民の観光に関する動向調査 調査概要

年度	平成28年度 (2016)	平成26年度 (2014)	平成22年度 (2012)	平成20年度 (2010)	平成20年度 (2008)	平成16年度 (2006)	平成14年度 (2004)	平成12年度 (2002)	平成12年度 (2000)
調査対象	15歳以上の男女個人	15歳以上の男女個人	15歳以上の男女個人	全国民(〃)	全国民(〃)	全国民(〃)	全国民(〃)	全国民(1歳以上)	満15歳以上の男女
調査対象期間	平成27年4月 -平成28年3月	平成25年4月 -平成26年3月	平成23年4月 -平成24年3月	平成21年4月 -平成22年3月	平成20年4月 -平成19年3月	平成17年4月 -平成18年3月	平成15年4月 -平成16年3月	平成13年4月 -平成14年3月	平成11年4月 -平成12年3月
標本数	-	-	-	4,500	4,500	4,500	4,500	4,500	4,000
有効回答数	10,000 (設計標本数)	10,000 (設計標本数)	10,000 (設計標本数)	記述無	3,181	3,214	3,344	3,251	2,990
回収率	-	-	-	記述無	70.7	71.4	74.3	72.2	74.8
調査対象	平成10年度 (1998)	平成8年度 (1996)	平成6年度 (1994)	平成4年度 (1992)	平成2年度 (1990)	昭和63年度 (1988)	昭和61年度 (1986)	昭和59年度 (1984)	昭和57年度 (1982)
調査対象	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女	満15歳以上の男女
調査対象期間	平成9年9月 -平成10年8月	平成7年9月 -平成8年8月	平成5年9月 -平成6年8月	平成3年9月 -平成4年8月	平成元年9月 -平成2年8月	昭和62年9月 -昭和63年8月	昭和60年9月 -昭和61年8月	昭和58年9月 -昭和59年8月	昭和56年9月 -昭和57年8月
標本数	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000
有効回答数	2,245	2,400	2,387	2,455	2,367	2,474	2,451	2,499	2,348
回収率	74.8	80.0	79.6	81.8	78.9	82.5	81.7	83.3	78.3
調査対象	昭和54年度 (1980)	昭和53年度 (1978)	昭和51年度 (1976)	昭和49年度 (1974)	昭和47年度 (1972)	昭和45年度 (1970)	昭和43年度 (1968)	昭和41年度 (1966)	昭和39年度 (1964)
調査対象	満18歳以上の男女	満18歳以上の男女	満18歳以上の男女	満18歳以上の男女個人	全国の18才以上の 男女個人	全国の18才以上 69才以下の男女	全国満18才以上の男女	全国満18才以上の男女	全国満18才以上の男女
調査対象期間	昭和54年9月 -昭和55年8月	昭和52年9月 -昭和53年8月	昭和50年9月 -昭和51年8月	昭和48年7月 -昭和49年6月	昭和46年9月 -昭和47年8月	昭和52年9月 -昭和53年8月	昭和50年9月 -昭和51年8月	昭和48年7月 -昭和41年6月	昭和38年9月 -昭和39年8月
標本数	3,000	3,000	3,000	4,490	3,000	3,000	3,120	3,040	3,040
有効回答数	2,488	2,582	2,480	3,565	2,521	2,353	2,497	2,622	2,622
回収率	82.9	86.1	82.7	79.8	84.0	78.4	80.0	85.5	85.5

の推移である。両者とも同じ参加率のデータを参照しているが、図 3 では年代の特徴、図 4 ではコーホートの特徴を掴むことを意図している。

図 3 から、1976 年から 1986 年にかけては 40 代以上の

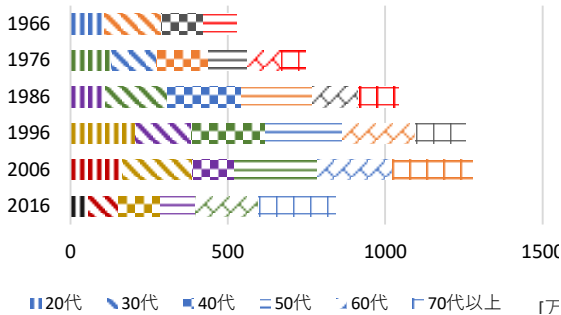


図-5 コーホート別宿泊観光旅行参加者数の推移[温泉/男性]

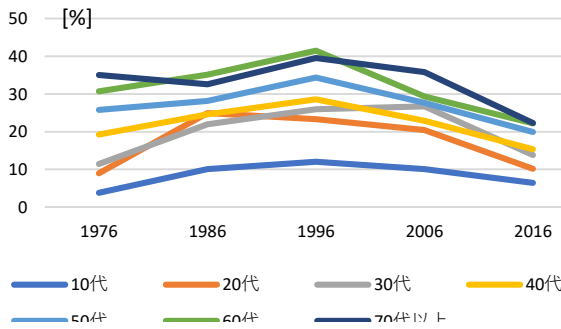


図-6 年代別宿泊観光参加率の推移[温泉/女性]

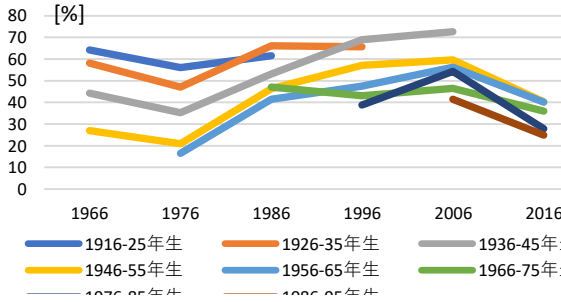


図-7 コーホート別宿泊観光参加率の推移[温泉/女性]

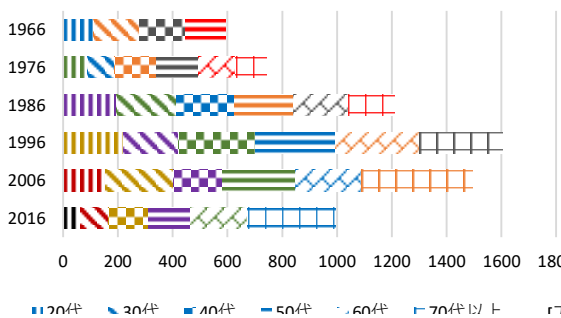


図-8 コーホート別宿泊観光参加者数の推移[温泉/女性]

年齢層が増加し、その後 1986 年から 1996 年にかけては 10-30 代の増加が窺える。もともと高齢層に人気だった温泉浴が新たに若年層に取り入れられることでブームとなったことが考えられる。

図 5 は、直前の図 4 を参加者数推移で示したものである。色でコーホート変化、模様で年代を表している。1966 年の 50 代については統計上「50 代以上」となっているため、その後のコーホート変化は年代種別が増えても同色(朱色)で示した。

また 10 代の統計については「15-19 歳(1964-80 年は 18-19 歳)」の統計であり他の世代と母集団が異なること、また家族旅行の同伴も含まれているため自主的な旅行とは限らないことを理由にコーホート変化を見るには適さないと判断しグラフから除外した。

これらから概ねコーホート毎に参加率が移り変わっていることが確認できるが、2016 年は参加率・参加数ともに若年層が衰退していることがわかる。

図 6-図 8 では女性のデータ参加データを示す。図 7 から、女性の場合は 1966-75 年生まれが 20 代から 30 代にかけて参加率が減少している。男性(図 4)と比較するとブーム終息において占めるコーホートが男女で異なることがわかる。

図 8 では参加者数を推計した。温泉は他 2 つのテーマより参加率・参加者数ともに多いが、これは温泉という日本の伝統的な観光テーマである性質があげられる。コーホート変化を見ても、各年代の参加分担状況に大きく変化がみられることは少ない。

b) テーマパーク

「国民の観光に関する動向調査」内の調査項目としては 1972 年からの登場となる。図 9 は、テーマパークの宿泊観光旅行者数と参加率を表している。社会的な出来事として 1987 年に総合保養地域整備法(通称：リゾート法)が制定され、月刊観光 1988 年 10 月号には『ごく近未来の新規リゾート需要に対する国主導のリゾートブームである』と述べられていることから、流行の発達期は 1980 年代後半からと想定する。

またバブル期に計画・建設された多くのテーマパークが 2000 年代の間に閉園していることから、流行の終息は 2000 年代後半以降と想定する。

図 10-図 12 に男性の参加データを示す。図 11 や女性の場合(図 14)にも言えるが、ブーム前の比較的早い時期に参加率の高いコーホート(例えば 1966-75 年生まれ)はブーム終息において大きく減少していることがわかる。逆に、ブーム前の 1976 年で 30 代以上のコーホートはその後の参加者数はほぼ変わらず推移していることがわかる。

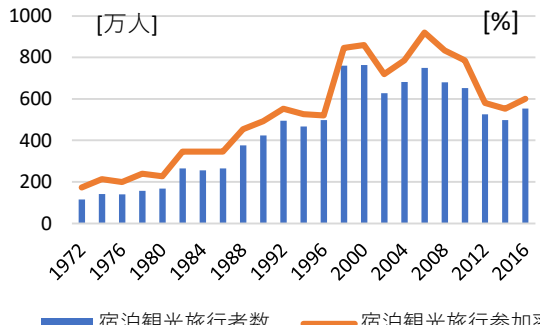


図-9 宿泊観光旅行者数と参加率の推移[テーマパーク]

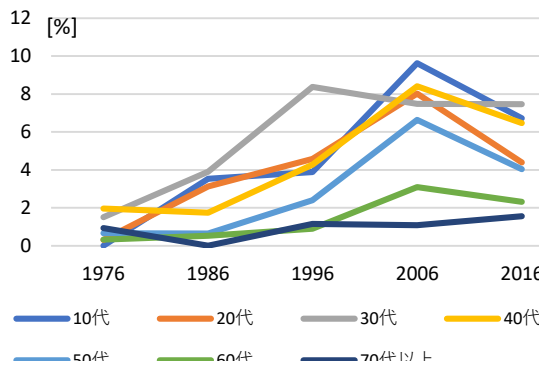


図-10 年代別宿泊観光参加率の推移[テーマパーク/男性]

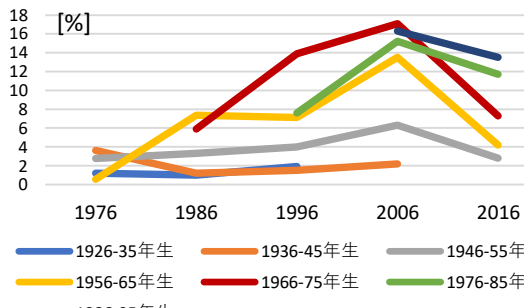


図-11 コーホート別宿泊観光参加率の推移
[テーマパーク/男性]

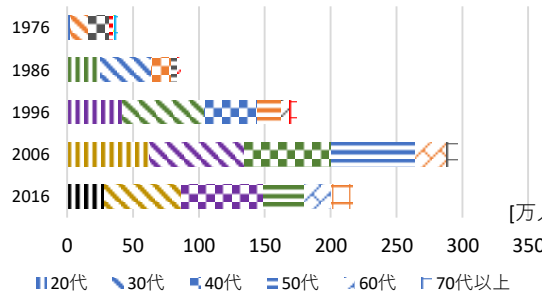


図-12 コーホート別宿泊観光参加者数の推移
[テーマパーク/男性]

次に図 13-15 に女性の参加データを示す。図 14 から、1986-96 年の変化では男性と同じく 1966-75 年生まれの伸びが著しいことがわかる。年代で言うと 20~30 代である。しかしその後 1996-2006 年の変化では男性では参加率が増加しているのに対し女性は減少しているなど、他にも男女での参加率推移の違いが散見される。

テーマパークの参加に関しては、男女間で全体数、増減の時期が異なっていることが多い。

図 15 のコーホート変化では、2006 年における 30 代以上のコーホートが 2016 年には大きく減少していることがわかる。また、どのコーホートにおいても 40 代以降になると参加者数が減少することがわかる。

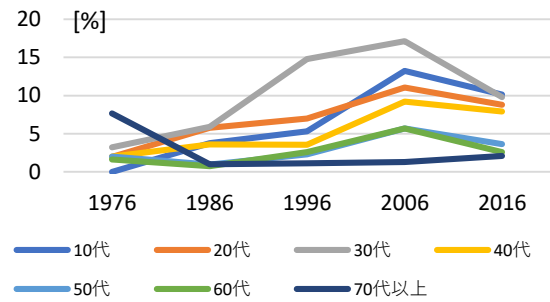


図-13 年代別観光宿泊参加率の推移[テーマパーク/女性]

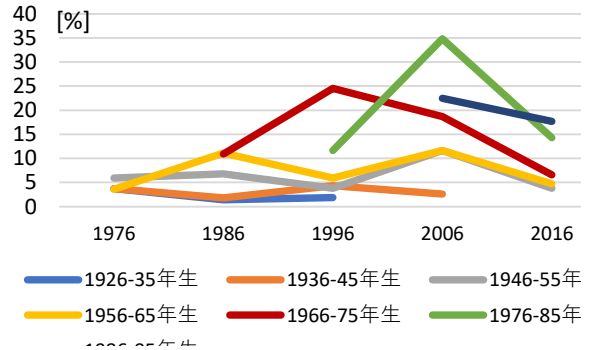


図-14 コーホート別宿泊観光参加率の推移
[テーマパーク/女性]

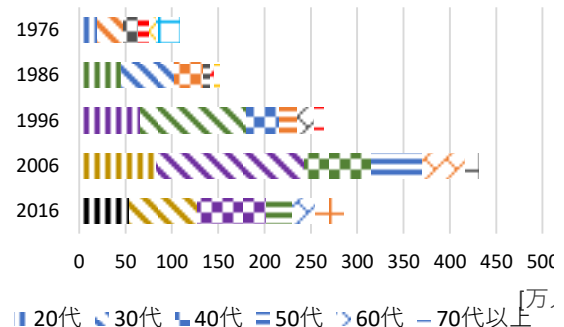


図-15 コーホート別宿泊観光参加者数の推移
[テーマパーク/女性]

c) 登山ハイキング

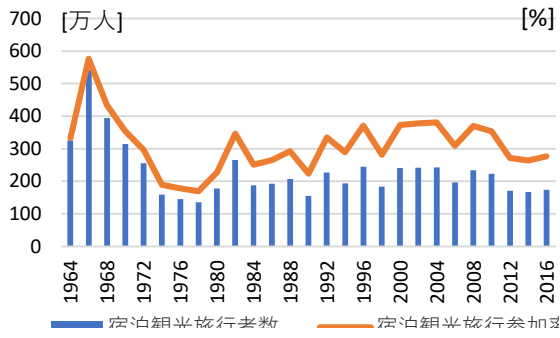


図-16 宿泊観光旅行者数と参加率の推移
[登山・ハイキング]

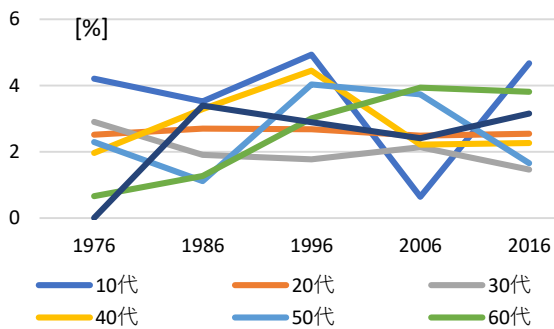


図-17 年代別宿泊観光参加率の推移
[登山・ハイキング/男性]

「国民の観光に関する動向調査」内の調査項目としては、一部で「登山・ハイキング」として一つの項目となっているため、全調査年度において「登山」「ハイキング」を合計したデータを使用した。

神谷(2011)¹¹⁾によると、1956年の日本登山隊によるマナスル初登頂をきっかけに戦後登山ブームが起こり、ほとぼり冷め1994年ごろにはテレビ報道番組による中高年日本百名山ブームが起こったとされる。また山形(2013)¹²⁾によると、近年は平成登山ブームであるとされる。以降ではこれら3つのブームが存在したと想定するが、戦後登山ブームについてはデータが不十分であるため、性世代別の一部考察からは対象外とした。

まずは登山ハイキング・男性の参加状況を示す。

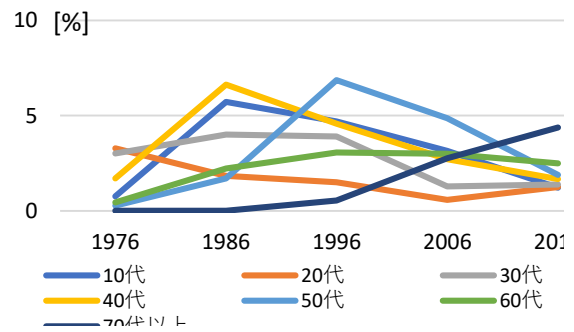


図-20 年代別宿泊観光参加率の推移
[登山・ハイキング/女性]

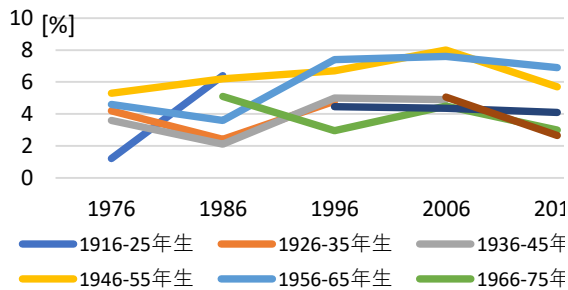


図-18 コーホート別宿泊観光参加率の推移
[登山・ハイキング/男性]

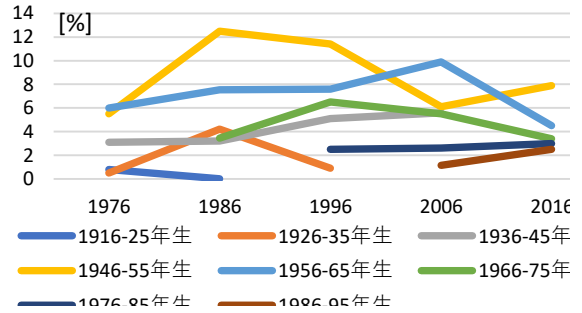


図-21 コーホート別宿泊観光参加率の推移
[登山・ハイキング/女性]

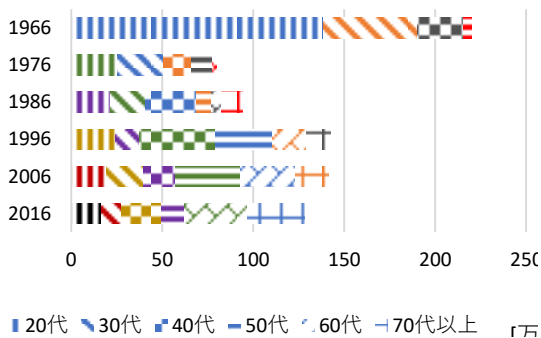


図-19 コーホート別宿泊観光参加者数の推移
[登山・ハイキング/男性]

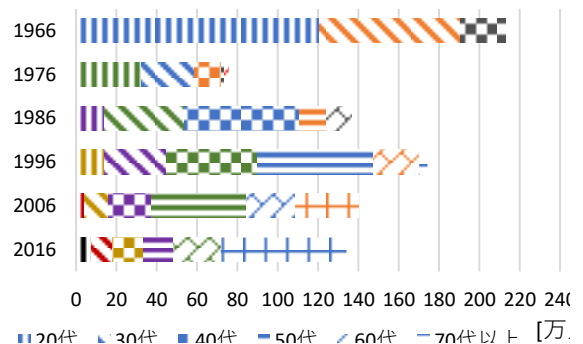


図-22 コーホート別宿泊観光参加者数の推移
[登山・ハイキング/女性]

図 17, 図 18 から, 全体的に頻繁に世代割合が変化していることがわかる。図 17 から, ブームの 1986 年から 1996 年にかけては 40-60 代以上の年齢層の参加率増加に加え, 10 代も増えている。しかしその後 2006 年にかけて 10 代は大きく減少している。

次に図 20-図 22 に女性の参加状況を示す。登山・ハイキングでは男女での参加率の様相が大きく異なっている。とくに女性に関しては 1986-96 年ではなく 1976-86 年がブーム発達期であるという見方もできる。

男性と同様, 1966 年における若年層の参加者数は多く, コーホート変化を見てもそのレンジは引き継がれていない。また男性と異なるのはその他のコーホート変化が不規則であることで, 女性の場合, 世代より時代・年代の影響が大きいと考えられる。特に近年(2016 年)は高齢層における参加者数が急増しており, 団塊の世代である 2016 年で 60 代のコーホートは母数が多いためさらなる増加が起こる可能性もある。

表-2 観光テーマ別流行パターン

	温泉ブーム	テーマパークブーム	登山ブーム(Ⅱ次,Ⅲ次)
ブーム発達と参加者増減	男:1986/96年 女:86/96	男:86/96/06 女:86/96/06	Ⅱ男:86/96Ⅲ男06/16 女:86/96女:06/16
ブーム終息と参加者増減	男:96/06 女:96/06	男:06/16 女:06/16	Ⅱ男:96/06Ⅲブーム中 女:96/06
ブーム発達の主な世代※1	男:①20代・②10代 女:①60代②70代以上	86-96男:30代 女:30代 96-06男:10代 女:10代	Ⅱ男:①50代・②60代 女:①50代・②60代 Ⅲ男:①10代・②70代
ブーム終息の主な世代※1	男:①40代・②60代 女:②60代・③50代	男:①20代・②10代 女:①30代・②10代	Ⅱ男:①10代・②40代 女:①30代・②40代
ブーム発達前と終息後※2	男:76<16 女:76<16	男:76<16 女:76<16	Ⅱ男:76<16 女:76<16

※1: 宿泊観光旅行参加率の増減上位 2 位(1 位太字)までを表記。テーマパークにおけるブーム発達 2 期はそれぞれ上位 1 位のみ表記(太字)。

※2: ブーム発達 10 年前と最新年度の 2016 年を比較。

以上の観光テーマ別宿泊観光旅行参加率の増減変化を整理すると表 2 のようになる。結果として, 性別の偏った流行の存在(登山Ⅲ次ブームは男性のみ増加)が見られたこと, 国内観光流行は若年層だけによって引き起こされるわけではないということ(温泉ブーム女性, 第二次登山ブーム男女), また今回見た 3 テーマではすべてにおいて流行終息後も流行前以上の参加水準を維持していることがわかった。そしてテーマパーク男女において, ブーム前の比較的早い時期から参加率の高いコーホート

はブーム終息時において大きく減少傾向であることがわかった。

5. おわりに

本研究ではまず国内の観光流行の変遷を大まかに整理した。過去の観光雑誌から流行に関するトピックを取り上げることで, 戦後からバブルにかけて様々な観光流行が存在したことが明らかになった。また同じ観光テーマで再度流行する例も見られた。次にそのような観光テーマの流行に関して, いくつかの例を取り上げ宿泊観光旅行参加率・参加者数を性世代別に算出した。その結果, 流行発生と終息における世代は必ずしも一致しないこと, 流行発達時の主な世代がブーム終息時期において大きく参加率が減少していることがわかった。

これまで観光に関係する流行現象を捉えようとした研究は少ないが, その一因として流行現象の定義の曖昧さがあると考えられる。先行研究においても, まず日本語の流行と英語の流行を示す「ファッション(fashion)」, 「ファッド(fad)」…などといった様々な語の定義の違いを述べる場合があるなど複雑化している。また実際の現象を捉えるうえでは, 観光でいえば観光客数の伸び率の具体的な設定なども本来必要となってくるだろう。本研究ではあえて「流行」の定義を行わなかったが, それは「流行」自体が個人の感性で異なること, また雑誌などによる報道で流行を感じるなど心理的な性質を持つ部分が大きいと判断したからである。しかしながら第 2 節の国内観光流行の整理を行った際, どこに「ブーム」の根拠があるのかが曖昧になってしまった。今後の観光流行研究においては, 流行現象そのものを捉えるために, 観光客増減の上昇率から判断するなどが考えられる。しかしながら雑誌の記述など世間で認知される「ブーム」と必ずしも一致しない可能性も含んでいる。

また, 今後の流行の継続性を探るうえでは将来の定量的な予測ができることが応用として行われることが望ましいと考える。たとえば過去の観光流行からベイズ推定を行うなど, 定性的な性質を述べるに留まらない結果にすることもできるだろう。

参考文献

- 1) オートキャンプ白書' 92,' 94-' 02,' 13' ,15 : 日本オートキャンプ協会。
- 2) 明瀬一裕:オートキャンプ歴史博物館,
<http://museum.world.coocan.jp/annex/index.html>
- 3) Simmel, G., : Philosophische Kultur: gesammelte Essays, Zweite um Einige Zusätze Vermehrte Auflage, Leipzig: Alfred Kröner Verlag, 1919. (=円子修平・大久保健治訳 『ジンメル著作集 7 文化の哲学』白水社, 1976.)

- 4) 角本伸晃：観光ブームの発生と消滅のメカニズム—アンケート調査に基づくシミュレーション—, 日本観光学会誌 J, 日本観光学会, 2006.
- 5) 赤壁弘康：観光消費の波及効果に関する確率的動学モデルと具体的政策提言のための実証的アルゴリズム, 日本観光学会誌 J, 日本観光学会, Na51, 2010.
- 6) 観光：日本観光協会編 通巻 137(1977.2)-139(1977.8)号.
- 7) 月刊観光：日本観光協会編 通巻 140(1978.5)-198,211-413(2001.3)号.
- 8) 佐藤真理子・日比野直彦・森地茂(2013)：複数の観光統計の個票データを用いた国内宿泊観光行動の時系列分析, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), 69 巻, 5 号, pp.L_533-L_543.
- 9) 日比野直彦・森地茂 (2006)：世代の特徴に着目した国内観光行動の時系列分析, 土木計画学研究・論文集 No.23, no.2, pp.399-406.
- 10) 日本観光振興協会：観光の実態と志向(国民の観光に関する動向調査)第 1 回～35 回, 1964-2016.(2000 年以前は 2 年に一度, 2001 年度より毎年調査実施・発行されているが, 今回は集計の都合上, 表 2 に示す通り 2002 年以降も 2 年毎の調査を参照した.)
- 11) 林田順子(2011)：<『山と溪谷』編集長の「山」論> 神谷有二 「山ブームに思うこと」 | Number Web <http://number.bunshun.jp/articles/-/127071> (最終閲覧 2017/4/26)
- 12) 山形俊之(2013)：平成登山ブームに関する一考察, 湖北紀要 第 34 号, pp.189-204.

(2018.?.??受付)

BASIC STUDY ON THE TRANSITION OF TOURISM TRENDS

Kota TANAKA, Naohisa OKAMOTO

Since a popular phenomenon related to various tourism (Tourism trends in the following.) occurs in Japan, it has been repeated to attenuate. It's being done with a target to get basic knowledge about such tourism trends by this research. How the domestic tourism trends which is the past first has changed, description of a travel magazine, and, it's put in order. After taking up more hot springs, theme park and mountain climbing / hikes about the tourism trends with the theme from the inside, it was put in order according to the sexual generation about each stay tourism participation rate and entry. The participation rate is big at boom attenuation time for the cohort with the high participation rate early time relatively from the result and before boom. It was found out that it decreases.